

続・ 珈琲の思い出十二

とある日のことだった。その日は新聞の朝刊に私のことが掲載されていたこともあり、朝から何だかそわそわ落ち着かなかった。

私が毎月行っている絵本のおはなし会がおかげさまで好評で、新聞社が取材にきたのだ。ちょうど今年が「子ども読書年」に制定されていたこともあって、取材は熱心だった。東京の大学で児童文学を専攻した私は、卒業後この地元の街に帰り、この書店に就職した。一つ年上の夫と結婚し、今は小学四年生と一年生の娘が二人いる。

恥ずかしいことに、私が絵本を片手につこり微笑んで子供たちに絵本を読んでいる写真がカラーで大きく掲載されている。おまけに、鈴木優子という本名の横にはしつかり34歳と年齢まで書かれている。

朝、新聞を開いてこの記事を目にしたときは嬉しいよりもむしろ恥ずかしくて、「どうか誰も読まないでいてくれ」と思ったほどだった。

書店に本社すると、当然ながら、店長はじめ、同僚たちから声をかけられた。「鈴木さん。新聞見たよ。」「写真も良かったよ！うちのいい宣伝にもなったね」

そんなわけで、何となく心が浮わついたら、一日が過ぎて行ったのだが、さらに、心臓が止まりそうになったことが夕方に起こった。

18時すぎ頃、そろそろ仕事を切り上げようかな、と考えながら、1階の入り口のメインの平台を整理していると、なんと入り口の自動ドアの向こうに、和樹がいたのだ。よほど急いでやってきたのか、両膝に手をつけて、呼吸を整えている。

私は慌てて自動ドアに駆け寄った。

「佑樹くんのお父さん、こんにちは。一体どうなされたんですか??」